

# プラトンの宇宙論と靈魂論

小 坂 国 継

## 序

プラトンの自然観ないし宇宙論は後期の対話篇『ティマイオス』に体系的に叙述されている。しかし、この『ティマイオス』はただ単にプラトンの自然観や宇宙論を叙述したものではない。それは『国家』の後をうけて、理想的な国家を述べる目的で書かれたものである。プラトンはこの作品のなかで、国家が成立する以前の人間の本性がどのようなものであるかを、はるか遠く宇宙の生成と構造のなかでとらえようとしている。本篇で宇宙の生成について論ずる前に、その導入部のところで、先に『国家』で論じた「理想国家」についてのソクラテスの考えの梗概をもう一度示したり、最終部で人間の靈魂とその本性について論じたりしているゆえんである。さらには、この作品は古代の伝説の島アトランティスの国制や風土や産物などを論じた『クリティアス』（未完）へとつながっている。それは両作品における登場人物が同じ顔ぶれであることからもうかがわれる。こうしたことから、おのずと『ティマイオス』がプラトンの著作に占める位置と役割をうかがうことができるだろう。

## I 『ティマイオス』における宇宙創造説の第一段階

1・1 以下の議論を円滑に進めるために、まず『ティマイオス』の梗概を示しておこう。

この対話篇のなかで、最初に、主人公であるティマイオスは、存在するものに、「恒常不変なもの」「生成しないもの」と「恒常不変でないもの」「生成するもの」とを分ける。前者はつねに自己同一を保持しているもので、理性（ロゴス λόγος）によって思惟されるものであるのに対して、後者はつねに生成消滅の過程にあるもので、臆見（ドクサ δόξα）によって感覚されるものである。しかるに生成するものには何か原因がなければならない。原因なくして何ものも生成することは不可能である。また何かを形成する場合、製作者が何らかの範型をもっていれば、それだけすぐれたものが製作されることは自明である。

以上のことを前提した上で、ティマイオスは宇宙（ウラノス οὐρανός, コスモス κόσμος）の創造を叙述していく。

1・2 まず考えなければならないのは、宇宙は始まりがなく、永遠の昔からあったものなのか、それ

とも始まりがあって、無から生成したものなのか、そのどちらであるのかということである。この問題に対してティマイオスは、宇宙は始まりをもち、生成したものであると答える。なぜかといえば、宇宙は見られるものであり、触れられるものであり、物的なものであるが、すべてこうしたものは感覚されるものであり、臆見によって把握されるものであるからである。臆見によって見られるものは「生成するもの」であることは上に述べたとおりである。

しかるに「生成するもの」には原因がなければならない。製作者ないしは創造者（デミウルゴス *δημιουργός*）がなければならない。また製作ないし創造にあたっては何かモデル（範型）となるものがなければならない。では、そのモデルは恒常不変で、つねに自己同一を保持しているものなのか、それともつねに生成変化しているものなのか、そのどちらであるのか。もし製作者が宇宙を良きものとして創ろうとしたのであれば、彼は永遠不動の自己同一者をモデルにして、それに似せて宇宙を創造したことは疑いの余地はない、とティマイオスはいう。それだから宇宙はロゴスと思慮（プロネーシス *φρόνησις*）と理性（ヌース *νοῦς*）によって把握される永遠なる同一者に模して造られた。したがって宇宙はアイデアの「似像」（エイコーン *εἰκὼν*）であるのである。

1・3 ではデミウルゴスはどのように宇宙を創造したのであろうか。デミウルゴスは善なるものであるから、できるだけ自分に似たように善なる宇宙を創造しようとした。質料としての世界は無秩序であったから、それをできるだけ秩序あるものにしようとし、「理性」（ヌース）を「魂」（プシュケー *ψυχή*）のうちに、また魂を「身体」（ソーマ *σῶμα*）のうちに宿らせるような仕方で宇宙を創造した。その結果、宇宙は魂を具え、理性を具えた生きものとして生成した。「この宇宙が、理性によって把握されるもののうち、もっともすぐれていて、すべての点で完全なものに似ていることを神（テオス *θεός*）は望んだ」<sup>1)</sup> (30D) とティマイオスはいつている。

ところで宇宙を創造するには材料（質料）がなければならない。デミウルゴスは材料として火と土という対極的なものを、また両者の中間にあるものとして水と空気を用い、それらが相互にできるだけ「比例」（アナログイア *ἀναλογία*）するように構築した。すなわち〈火〉対〈空気〉が〈空気〉対〈水〉に等しく、〈空気〉対〈水〉が〈水〉対〈土〉に等しいように構築した。そこにはつぎのような意図があった。第一に、それが完全な部分からなる最大限に完全な全体であるような生きたものであること、第二に、それが存在する唯一の宇宙であること、第三に、それが老いもしなければ病にかかることもないことである。いいかえれば、デミウルゴスはどれも完全な材料から、一つの全体として完結した不老不病のものとしてこの宇宙を構築したというのである。

またデミウルゴスは、この宇宙に完全な形をあたえるため、あらゆる形を内に含んでいる円球の形をあたえ、それを「中心からどの方向への距離も等しい球体」に仕上げた。この完全な球体の宇宙は有限であるが、自足的であるから、そこからは何一つとして出ていくこともなく、また反対に入ってくるこ

<sup>1)</sup> 『プラトン全集』12, 岩波書店, 1975年, ただし引用文は訳文どおりではない。以下同様。

ともない。さらに、この宇宙を手足でもって運動する必要のないように、つねに同一の場所で循環運動をするように作り上げた、といっている。

以上のような宇宙創造説にはエンペドクレスの四元素説、ピュタゴラスの比例（調和）の思想、パルメニデスの「有」の概念、アナクサゴラスの「理性」（ヌース）の考えが取り入れられているのは明白である。この点で、プラトンの宇宙創造説はソクラテス以前の自然哲学の総合統一の試みであるともいえるだろう。

**1・4** 一方、デミウルゴスはこの宇宙の中心に魂を置き、この魂を宇宙の全体に、またその周囲にくまなく行きわたらせた。宇宙の魂と身体との関係は主人あるいは支配者と被支配者との関係にあり、デミウルゴスは魂をその本性においても、また能力においても、より先なるものとして作った。

では、そうした魂はどのようにして作られたのであろうか。ティマイオスの説明はつぎのとおりである。

デミウルゴスは、「分割不可能で、つねに自己同一を保持している有」と「分割可能な有」の中間に、その両者を混ぜ合わせて第三の種類の有を作り、また「同」（アウト αὐτό）と「異」（ターテロン ἄτερον）についても、それらのうちの分割不可能なものと、物体の領域の分割可能なものとを混ぜ和せて第三の混合物を作り、さらにそれらを混ぜ和せて一つのものにした。そしてそうした後に、この全体を、そのどれもが「同」と「異」と「有」から混合された部分に区分した<sup>2)</sup>。ティマイオスは、この魂の分割の仕方を子細に述べているが（35B-36D）、あまりに煩瑣であるので、ここでは割愛することにする。ともかく魂は比例と割合と数列によって分割されており、そこにピュタゴラス的思考の影響が顕著にみとめられる。

こうして宇宙の魂の組織全体が構築されると、つぎに魂の身体となるものの全体を魂の内部に組み立てていき、両者の中心と中心を合わせて適合させていった。そして魂は、その中心から宇宙の果てにいたるまで、あらゆるところに組み込まれ、またその周囲全体を外側から覆い、みずから自分の内部で回転しながら、不断の知的な活動をつづけるべく踏み出したという。（36D-E）

**1・5** 以上のようにして宇宙の魂と身体の生成が叙述されると、今度は、時間が永遠をモデルにして作られたこと、太陽、月、金星、水星などの七つの惑星が時間の数を区分し、これを見張るものとして作られたことが語られ、またこれらの惑星が、そのうちなる「同」と「異」の循環運動によって、どのようにそれぞれの軌道を回転していくかが詳細に論じられている。（37B-39E）

また、この後、神々、鳥類、水棲類、陸棲類の生成について順次に語られ、いよいよ最後に、人間の男性と女性の誕生について、さらには人間の身体の重要部分である頭、手足、目と視覚、耳と聴覚につ

<sup>2)</sup> この「分割できない有」と「分割可能な有」および「同」と「異」とは何であるか、またそれら相互の関係はどうなっているかについては種々の解釈があるが、そうした煩瑣な問題はプラトンの宇宙観にとって本質的な問題ではないと思われるので、ここでは触れないことにする。『全集』「解説」参照。

いて論じられている。一言でいえば、それらは「理性」(ヌース νοῦς) と「必然」(アナンケー ἀνάγκη) との結合から、その両要素の混成体として作られたというのである。ここで「必然」といっているのは火・空気・水・土の四元素を指しているようである。これらの元素は理性によって説得されないかぎり、秩序を欠いた働きをすと考えられているようである。

1・6 ここまでが全44節の内容の17節までの梗概である。デミウルゴスが無から宇宙を創造したという思想は旧約聖書の『創世記』を想起させ、またあらゆる可能性のなかから最善の世界を製作したという思想は、後のライプニッツの『弁神論』を彷彿させる。

けれども『創世記』においては、主は無から天地を創造したのに対して、『ティマイオス』においては、デミウルゴスは無から天地を創造したのではなく、アイデアに似せて材料(四元素)から天地を創造したのである。いいかえれば、(形相の欠けた)材料を秩序づけ、これにできるだけ良き形をあたえたのである。それだからデミウルゴスは厳密な意味では世界の創造者ではなくして製作者であることになるだろう。

もっとも『創世記』の冒頭にも、「地は形なく、むなしく、闇が淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」(1・2)と記されているから、天地創造以前の世界がまったくの無であったわけでもない、と解釈することもできるだろう。だとすれば、『ティマイオス』の天地創造説と『創世記』のそれは、きわめて近似した考えであるといえるだろう。この点からすれば、キリスト教の教父たちがいうように、プラトンの天地創造説は『創世記』をもとにしているといえるかもしれない。しかし旧約聖書学者ヘルマン・グンケル(Herman Gunkel)は、『創世記』の物語が古代オリエン特神話をもとにして書かれたものであることを明らかにしている<sup>3)</sup>。もしグンケルの指摘したとおりだとすれば、『創世記』と『ティマイオス』はともに古代の東方民族神話にもとづいたものであるということにもなる。

また『ヨハネによる福音書』の冒頭には、「初めにロゴスがあった。ロゴスは神とともにあった。ロゴスは神であった。このロゴスは初めに神とともにあった。すべてのものはこれによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」(1・1-3)とある。これを文字どおりにとれば、天地はロゴスにしたがって創られたということであろう。すると、この文章は、天地はアイデアを模倣して創られたという『ティマイオス』の思想と符合するようにも思われる。ロゴスをアイデアに置きかえれば両説の間に齟齬はないといえるだろう。

けれども『ヨハネによる福音書』におけるロゴスは「ことば」であって、それは神の意志を表現するものである。「神は〈光りあれ〉といわれた、すると光があった」といわれるように、神の言葉は神の命令であり、神の意志の端的な表現である。これに対してアイデアを模倣して天地を創造したとする『ティマイオス』の天地創造説は、デミウルゴスの意志の表現ではなく、世界の理性的な構築を説こうとするものである。いいかえれば、それは世界の論理性を主張しようとするものであるといつてよい<sup>4)</sup>。しか

<sup>3)</sup> Herman Gunkel, *Schöpfung und Chaos in Urzeit und Endzeit*, 1895.

<sup>4)</sup> 山田晶「デミウルゴスについて」『プラトン全集』12, 岩波書店, 「月報」参照。

も聖書の場合は、天地は神の意志であるロゴスそのものの表現であるが、『ティマイオス』の場合は、天地はアイデアそのものの表現ではなく、アイデアの模倣であり、似像であるところに相違がある。プラトンにおいては、現実界はアイデア界からの墮落であって、けっして積極的な世界とは考えられていない。

## II 宇宙創造説の第二段階

2・1 さて、デミウルゴスは何もないところから世界を創造したのではなく、四元素を材料として、それに形相を付与することによって世界を創造したのである。だとすると、そうした材料がそこで形相化される場としての空間がなければならぬだろう。ちょうどデモクリトスの原子論において、原子と原子が結合して事物ができるという場合、原子と原子が自由に動くことのできる空間(ケノン *κενόν*)がなければならなかったように、事物を形成する材料がそこでアイデア(形)を受けとる場所がなければならぬ。アイデアの受容者としての場所ないし空間がなければならぬ。これがティマイオスの宇宙創造説の第二段階を形成するものである。

そこで、ティマイオスはもう一度、二種の有について語っている。ここで二種の有というのはアイデアと感覚物(アイステートン *αἰσθητόν*)である。前者は「モデルとなるもの」、「理性の対象となるもの」、「つねに自己同一を保持しているもの」であり、後者は「モデルの模造品」、「生成するもの」「可視的なもの」である。プラトンはこれに第三のものをあらたに付け加える。それはいわば「受容者」(ヒュポドケー *ὑποδοχή*)と呼ばれるものであって、文字どおりアイデアを受けとるもの、あるいは(形相と質料の)媒介者である。それでしばしば「乳母」にたとえられている。この三者は「生成するもののモデル」(アイデア)と、「生成するもの」(感覚的事物)と、「生成する場所」すなわち「生成するものが、そのなかで生成する当のもの」(空間)とである。そしてこの三者の関係は父と母と子の関係に比せられる。すなわち形相(アイデア)が父であり、受容者(コーラ)が母であり、感覚物(アイステートン)が子である。

この場合、注意しなければならないのは、受容者(場所)は、それ自身のなかに受容するもの(アイデア)とはまったく無縁であるということである。というのも、もし受容者が、自分が受容するあるものと形が似ているとすれば、自分と形の似ていないものを受容するとき困難を来たすだろうからである。それだから受容者自身はいかなる形をももたないものでなければならない。譬えていえば、それは風呂敷のようなものであろう。風呂敷は、自分がいかなる(立体的な)形をももたないからこそ、どのような形のものをも包むことができる。これと同様に、空間(コーラ)は、それ自身はいかなる形をももっていないから、どんな形のものをも受け容れることができる。

またこの受容者は火・空気・水・土のような四元素でもないし、それらの諸元素の混合物でもない。それはいかなる形をももたないものであり、目には見えないものであり、あるいはまた何でも受け容れるものであり、理性の対象の一面をももっていて、とらえがたいものである。この四元素と受容者との関係をティマイオスはつぎのように述べている。

そのもの（受容者）の火化された部分が、いつでも火としてあらわれ、液化された部分が水としてあらわれ、土、空気の場合も、同じく受容者がそうした土や空気の模像を受容するかぎりにおいて、そのようなものとしてあらわれる。（51B）

ここには受容者について積極的な主張がなされているように思われるが、その点については後に述べることにして、もう少しティマイオスの論旨を追っていくことにしたい。

以上のことをまとめると、つぎのようになるだろう。

宇宙の生成には三つのものが前提される。

第一は、形相（イデア）である。これはけっして生ずることも滅することもなく、つねに自己同一を保持している。また自己のなかに他のものを受容することもなく、反対に他のもののなかに入っていくこともない。けっして見えることもなく、一般に感覚されないものであって、ただ理性（ヌース）の対象となるものである。

第二は、感覚物（アイステートン）である。これは生成し消滅するものであり、つねに変化し運動しているものである。ある場所に生じては、またそこから滅していくものである。感覚の助けを借りて、「臆見」（ドクサ）によってとらえられるものである。

第三は、空間（場所・コーラ）である。これは生成消滅するものに、その場所を提供するものである。およそ有るものは、どこかになければならず、また一定の場所を占めていなければならないだろう。それが、ここでいうコーラである。コーラはこのようなものとして、それ自身は生じもしなければ滅することもなく、したがってまた感覚によって見られるものでもない。こうしてティマイオスは、先に「受容者」（ヒュポドケー）といていたものを、明確に「場所」（コーラ）として確定する。

この「場所」はデモクリトスの「空間」（ケノン）と似ているが、ケノンが、原子がそのなかを移動する単なる虚空間であるのに対して、「場所」（コーラ）は、先の引用文にもあるように、そこで四元素や、その混合物である感覚物が占有する、いわば部分的な空間であると考えられる。すなわち存在の材料である諸元素が、イデアの受容者である場所（コーラ）において、イデアを受けとることによって感覚物が生成するというのである。

**2・2** このように宇宙の生成には三つの要素が考えられている。まず、そのモデル（範型）となるイデアである。つぎに、その材料となる諸元素である。そして最後は、この材料が、そのなかで形を受けとる場所、すなわち材料がみずからを有形化する空間である。デミウルゴスは永遠不動のイデアを模型にして、材料である四元素を用いて、場所（コーラ）のなかに感覚物を生成させた。これが第二段階における宇宙の生成説である。一応、説明としては合理的であるように思われるが、そこにはいくつか問題点が含まれている。それはいずれも「場所」（コーラ）の観念にかかわるものである。

まずコーラの性格がきわめて曖昧であることが指摘されねばならない。「場所」（コーラ）は目によっ

で見られることもなく、また生成もしなければ消滅もしないという点では理性の対象であるアイデアに似ている。一方、それは、自分自身はどのような形もっていないという点では、感覚物の材料である四元素に似ている。コーラはいわばアイデアと材料(要素: ストイケイオン στοιχείον)の中間者であり、また両者の仲介者あるいは媒介者でもある。

けれども、先の引用文では、アイデアの受容者であるコーラの「火化された部分が、いつでも火としてあらわれ、液化された部分が水としてあらわれる」と述べられていた。この文章を文字どおりに理解すると、コーラの「火化された部分」が「火」となってあらわれ、「液化された部分」が「水」としてあらわれるということであろう。だとすれば、コーラと火や水とは本質的に別個のものではなくて、火や水はコーラ自身の部分であり、その発現であることになるだろう。火・水・空気・土という四元素があるのではなく、それらは場所自身の発現であることになるだろう。火そのものとか、水そのものとかいうのはどこにも存在しないことになる。あるのは場所自身の部分であり、その発現である。そしてこのことは、これら四元素の混合物であるあらゆる感覚物についてもいえるはずである。目に見える一切のものは場所自身の発現であり、その形相化であることになるだろう。

一方、アイデアは四元素などの感覚的諸性質や感覚物から独立に存在することは不可能である。なぜかといえば、もしそうだとするならば、それがどうして四元素や感覚物に臨在するのか、みずからを具現するのかを説明できない。というのもアイデアそのものは永遠不動であって生成変化することはなく、つねに自己同一を保持していると考えられているからである。それだからティマイオスは、アイデアは感覚物の単なる範型であって、デミウルゴスはアイデアをモデルにして、これに模して感覚物を作ったという。そしてこの意味で、すべての感覚物はそれぞれのアイデアを分有しているのだという。

けれども論理的に考えれば、アイデアが場所のなかにみずからを具現するということは、アイデア自身が場所的性格をもっていなければ不可能であろう。それは理性によって知られるものであるアイデアがコーラにおいて見られるものとなるということではなければならない。この場合、アイデアからコーラに向かう道はない。というのもアイデア自身はいかなる内在化の原理をもたないからである。したがってコーラの方からアイデアに向かう道を考えなければならない。つまりコーラは自己自身をアイデア化するのである。

こうしてコーラは、一方では、四元素(ストイケイオン)の形相化の原理であり、他方では、アイデアの具現化の原理でもあることになる。プラトン自身も、「それ自体でそれぞれのものとして独立にある」(αὐτὸ καθ' αὐτό) ようなものがはたして存在するのかどうかという疑問を提示しているが(51C)、それは感覚物の材料(要素)についても、またその形相についてもいえるだろう。むしろ両者はコーラがもっている二つの契機と考えなければならないのではなからうか。形相としてのアイデアと質料としてのストイケイオンがあって、両者がコーラにおいて結びついて感覚物(アイステートン)になるというのではなく、コーラ自身がみずからを具象化して目に見えるものになるのだと考えなければならないのではなからうか。もしそうだとしたら、コーラは静的で受動的なものではなく、反対に、どこまでも動的で能動的なものと考えなければならない。そしてアイデアとストイケイオンはこうした活動的なコーラが

もっている二つの契機と考えられる<sup>5)</sup>。

**2・3** この後、プラトンは四元素の粒子の結合を種々の正多面体の結合として幾何学的に叙述している。たとえば火の粒子は正四面体であり、空気は正八面体、水は正二十面体、土は正六面体であるとされる。そしてそれが二個合わさって正八面体である空気の粒子が形成されると説いている。そして火・土・水・空気の四元素の相互の作用と、分解と結合の仕方が、原則として三角形による分解と結合として説明されている。ここにプラトンの数学趣味が有体にあらわれているといえるが、彼自身も確信をもってこうした自説を展開しているのではなく、それらをありそうな仮説として述べているにすぎない。それゆえ、われわれはその論旨を逐一詳細に検討することは控えたい。

こうして各々の粒子とそれらの分解と結合の仕方を幾何学的に論じた後、プラトンは「動」と「静」について、さらには「熱い」「冷たい」、「重い」「軽い」、「快」と「苦」などの感覚的諸性質について、さらには「心臓」「肺」「胃」「腸」などの身体の諸器官とその合目的なはたらきを、いずれも上述した粒子の分解と結合の作用として説明している。そして彼が最後に説いているのが、身体と魂との関係である。

**2・4** まずプラトンは、一般に、美の本質は均整や調和にあるが、身体の美しさも全体の均整と調和にあることを説き、こうした均整と調和が保持されているとき、身体はまた健康でもあると説いている。そしてこのような均整や調和は身体と魂の間関係にも要求されるといっている。たとえば魂の方は力強く、あらゆる点で偉大であるのに、他方、身体の方はあまりに脆弱であるような場合、またその反対であるような場合、そこには均整と調和が失われているから、そうした人間は美しくなく、また健康でもない。身体の一部、たとえば足とか頭とかが極端に長すぎたり大きすぎたりした場合、その身体は美しくはなく、また健康でもないように、身体と魂の合成体である人間の、魂の方が強大で身体の方が虚弱である場合には、魂の激しい運動が身体にさまざまな病気をもたらす。またそれとは反対に、魂よりも身体の方がはるかに強大である場合は、人間もっている二つの欲望、すなわち身体に由来する食欲と魂に由来する知識欲のうち、食欲の方を優勢にさせ、知識欲の方を委縮させ、弛緩させて、最大の病気である「無知」を作り出す。

これを防ぐ最大の方法は魂と身体の均衡以外にはない。そのため、日頃、精神的な仕事に従事している人は体育にも親しむ必要があるし、反対に、身体的な仕事に従事している人は音楽や文芸や、さらには哲学にも親しむ必要がある。こうしてプラトンは魂のはたらきと身体の運動との適度の均衡を力説しているが、その場合でも、「個々の生きものの三角形が、そもそもの最初においてすでに、ある一定の時間までは、十分に事足りるだけの能力はもつけれども、その限度を超えると、けっして生きられないように構成されているから」(89C) だと、幾何学を根拠にして説明している。いかにもプラトンらし

<sup>5)</sup> 拙稿「プラトンのアイデアについて」(『研究紀要』日本大学経済学部、第77号)参照。

いとはいえるだろう。しかし、ここで説かれている魂と身体の均衡と調和という考えは、いわゆる魂の不死説や死の訓練説とは異なった要素を含んでいるともいえる。それは身体の健康を、魂の健全なはたらきにとって不可欠のものとする考えであって、身体は魂の桎梏であるという考えとは異質な性格のものであるといえるだろう。

2・5 とはいえ、魂が、そして魂の最上のものである理性が身体の上位にあり、身体を教え導いていく役割をもったものであるという考えは健在であって、プラトンは理性を「ダイモン」と呼び、身体を天界へ向かって持ち上げているものだともいっている (89D-90B)。そして理性を魂のうちで最大限に不死性にあずかるものであるから、これを十分に世話し、そうすることによってもっとも良き生をまっとうしなければならない、と説いている。この魂の「世話」については、後に見るように、『パイドン』でも説かれているが、『ティマイオス』では、「各々に対して、それに固有の養分と動きをあたえてやること」(90C) であると規定している。

以上のように、プラトンは『ティマイオス』の最終部分で、魂の世話や魂の不死について触れているが、その所説はあまりに断片的に過ぎ、われわれがそれについて検討するに十分な材料を提供していない。そしてこの点については、『パイドン』や『国家』の方が豊富な資料を提示している。

### Ⅲ プラトンの靈魂論

3・1 「魂について」という副題のついた『パイドン』では、文字どおり、魂にかかわるさまざまな問題が論じられている。ソクラテスの思索の動機が魂への配慮にあったことは周知のことである。しかし魂への配慮がおこなわれるためには、そもそも魂とは何かということが明らかにされねばならないだろう。また魂とは何かを知るには、魂と肉体との関係が明らかにされなければならない。

そもそも「知を愛する者」(哲学者、ピロソポス, φιλόσοφος) は魂を肉体から分離させなければならない、とプラトンはいう。なぜかという、真実は見ることや聞くことなどの肉体的な働きのうちにはなく、思惟(ロギゼスタイ λογίζεσθαι) の働きのうちにあるからである。しかるに思惟の働きは、魂がどのような感覚の働きや、快苦の感情によっても煩わされることがないときに、もっともよく発揮される。ということは、魂が肉体と接触することなく存在そのものに至ろうとするときに、最善の仕方でおこなわれる。この意味で、哲学すなわち「知を愛すること」は死を学ぶことであり、死の訓練である。

魂が肉体から分離することは、魂が肉体という桎梏から解き放たれることであり、自己自身のうちに住まうように慣れさせることである。いいかえればそれは魂の浄化(カタルシス κάθαρσις) である。だとすると、魂の浄化は、魂の、肉体からの分離と解放にある。しかるに魂の肉体からの分離と解放は死と呼ばれる。それだから「知を愛するもの」はつねに自分の死を練習していることになり、したがってまた死は何ら恐れるべきものではなく、むしろ歓迎すべきものとなるだろう。

3・2 死とは魂が肉体と分離することであり、肉体が肉体だけのものとなり、魂が魂だけのものとなるということである。この魂と肉体の分離ということについては『ゴルギアス』(524D)にも同趣旨のことが語られているが、『パイドン』では、それが「魂が魂だけのものとなる」ということであり、またそこに重要な意味があるのだということが語られている。そして魂の不死説はここから出てくる。

プラトンは魂の不死を説くにあたって、死後の魂のあり方についての従来の二つの考え方を提示している。一つは、ホメロス流の伝統的な考え方であって、魂は肉体から離れると、ハデス(冥界 *Ἅιδης*)に至るが、そこで、まるで氣息や煙りのように雲散霧消して滅びてしまうという考え方である。もう一つは、オルベウス教と結びついたピュタゴラス学派の考え方であって、「魂は、ここよりかしこに至って、かしこに存在し、またふたたびここに至り、死せる者から生まれ出る」というものである。無論、プラトンは後者の説を支持する。プラトンによれば、一般に、相互に反対関係にあるものは、その一方はかならずその反対から生ずる。大きいものは小さいものから、強いものは弱いものから、悪いものは善いものから、そしてその反対も同様である。だとすれば「生きているもの」は「死んでいるもの」から生ずることになるだろう。ここには「このものは転化してかのもものとなり、かのもものが転化してこのものとなる」(B88)と説くヘラクレイトスの考え方が継承されている。

「目覚めていること」に対して「眠っていること」があるように、「生きていること」に対して「死んでいること」がある。そして「目覚めていること」から「眠っていること」が生ずるように、「生きていること」から「死んでいること」が生じ、またその反対も然りである。すると「生きていること」から「死んでいること」への過程があるように、「死んでいること」から「生きていること」への過程もなければならぬことになる。いいかえれば、それは死から生への蘇がえりの過程である。だとすれば死者たちの魂がふたたび蘇がえるべく冥界で存在していたということになるだろう。というのも、もし生きているものが死んで蘇がえらなかつたら、死んだものだけがあることになって、万物はいつか死に絶えてしまうことになるだろうからである。

3・3 以上のようなプラトンの所説には誤謬推理があることは明白である。たとえヘラクレイトスのように、万物はその反対物から生ずるということをみとめたとしても、したがってまた「生きているもの」は「死んでいるもの」から生ずるということをみとめたとしても、その「生きているもの」と「死んでいるもの」が同じ魂であるという証拠はどこにもない。生きているものが死に、死という無から生が生ずるのは道理であるとしても、新しく生れてくるものが、死んだものと同じ魂をもっているということは証明できない。「もし万物は転化する」ということをみとめるのであれば、ヘラクレイトス自身がいつているように、「われわれは同じ河に二度と入ることはできない。たとえ河は同じでも流れる水は異なったものである」(B12)ということをもみとめなければならぬだろう。これと同様に、「死んでいるもの」から「生きているもの」が生ずるとしても、その生ずるものが死んだものと同じ魂であるという証拠はどこにもない。プラトンの魂の不死説には一種の詭弁がみとめられる。そこでは、普遍的な生死と個別的な生死が同次元で論じられているが、しかし一般に死から生が生ずるということと、

ある個別者の死からその者の生が生ずるということとはまったく別のことがらである。

**3・4** さて、ここからプラトンはまた知識は「想起」(アナムネーシス ἀνάμνησις) であるという結論を導き出している。

われわれがあるもの (A) を見て、それがあるもの (B) と等しいという場合、かならずしもその A と B がまったく同一であるといっているわけではない。そこには、ぴったりとは符合していない部分があることを容認している。たとえば現実にある美しいものは美しさ自体ではない。たしかに両者は類似してはいるが、現実にあるものには何か欠けている要素がある。それは不完全なものであって、美そのものではないということのをわれわれは承知している。ということは、われわれは等しいもの (A・B) と、美しさ自体 (C) とを区別しているということであろう。また同時に、美しさ自体を知っているということでもあろう。というのも、われわれが美しさ自体を知っているのであれば、A と B が等しいということをも知ることができないであろうからである。だとすれば、われわれはすでに美しさ自体を知っていて、あるもの (A) を見たときに、美しさ自体 (C) を想起し、そのあるもの (A) とあるもの (B) とが等しいことを知るのだということになる。

思うに、生まれる以前にそれらの知識を得ておきながら、生まれてくるときに失ってしまい、後になって感覚を通して、それらの存在についての知識をふたたび得るのだとしたら、その場合、知るということは想起することだということになるだろう。(75E)

すると、ここから魂が不死であるという結論が生ずる。というのも、魂が肉体の死とともに滅びるのであれば、われわれはかつて有していた知識を想起することは不可能であるからである。魂は人間のなかに存在する以前にも、肉体から離れて、しかも知識をともないながら、存在していたということになる。(76C)

**3・5** 魂の不死説と知識の想起説については『メノン』でも語られている。『メノン』における想起説の特徴は、それが『パイドン』や『国家』においてのように、イデア論と結びつけて語られるのではなく、イデア論が説かれる以前の原初的な形で、しかも直截に語られているところにある。

ここでは魂が不死であることと、知識が想起にほかならないことが何の前提もなく、いきなり提示され、論じられている。そして知識が教えによってではなく、想起することによって得られることが一つの事例でもって示されている。

ソクラテスはメノンの召使いの子供に、あたえられた正方形の二倍の面積をもった正方形を作図するにはどうしたらよいかという問題をあたえる。無論、召使の子供はその問題に即座に答えることはできない。それは、今日のわれわれでも答えることのできない、なかなかの難問である。無学な子供に答えられるはずはない。そこでソクラテスはごく簡単に基本的なことから質問をする。最初のうちはソクラ

テスの質問に容易に答えていた子供も、しだいに答えを見出すことができなくなったり、間違った答えを出したりする。たとえば、最初、あたえられた正方形の一片の長さを二倍にすることを思いつくが、それだと出来上がった正方形の面積は四倍になってしまうことは瞭然である。そこでソクラテスは出来上がった四倍の面積をもつ正方形を四つのブロックに分け、それぞれのブロックを半分にするにはどうしたらよいかを尋ねる。こうして問答を積み重ね、行き詰まると元に戻ってもう一度考え直していく過程で、その子供は、あたえられた正方形の対角線を一片とする正方形を作図すれば、それがあたえられた問題の答えになることを知る。問答の中でソクラテスは何も子供に知識を授けるわけではない。ただ辛抱強く問答を繰り返しているだけである。答えはその子供が自分自身で見出している。知識は子供自身から生まれている。ソクラテスはただその手助けをしているにすぎない。いわゆる「産婆術」(マイエウティケー *μαιευτική*) の見本のような「対話」(ディアレクティケー *διαλεκτική*) である。

けれどもこの対話によって、はたして知識は想起であるという結論が生ずるだろうか。奴隷の子供が正方形や面積などの幾何学的な知識を生まれつき持っていて、ただそれをソクラテスとの問答を通して思い出したのだといえるだろうか。むしろその子供は魂のまったくの白紙の状態から、ソクラテスの適切な導きによって、一步一步、知識を獲得していったという方が理にかなっているのではなからうか。思い出したのではない、学んだのである。有から有が生じたのではなく、無から有が生じたのである。後にロックが生得観念を否定して、精神は生まれたときは何も書かれていない「白紙」(タブラ・ラサ *tabula rasa*) の状態であったが、経験によって一つ一つ観念を自分の内に形成していったと主張しているように、魂はまったくの無の状態から、理性と経験の助けによって、徐々に知識を蓄えていったというべきである。そしてもしそうだとすれば、この想起説によって根拠づけられた魂の不死説もまたその正当性を失うことになるだろう。

#### IV プラトンの徳論

4・1 『国家』は「正義について」という副題がついている。正義とは何かを論ずるのが『国家』の意図である。では「正義」(ディカイオシュネー *δικαιοσύνη*) とはいったい何であろうか。一言をもっていえば、プラトンは正義を調和と見た。国家にもとめられているのは「知恵」であり、「勇気」であり、「節制」である。そしてこの三つの徳がそれぞれに過不足なく、その能力を発揮し、国家全体がつり合いのとれた状態が「正義」であるとプラトンはいう。

理想的な国家の構成要素の第一は「知恵」(ソ피아 *σοφία*) である。ここで知恵というのは特定の分野の「知識」ではない。たとえば大工や農業などの技術にかかわる知識ではない。国家を統治するための知識である。「完全な意味での統治者」としての知識である。したがって、それは国民全員にもとめられるような知識ではなく、国家の統治者にもとめられる知識である。したがって国家の統治者としては哲学者がもっともふさわしいことになるだろう。

国家の第二の構成要素は「勇気」(アンドレイア *ἀνδρεία*) である。勇気とは一種の保持である、と

プラトンはいう。ここでいう保持とは、おそろしいものとはいったい何であり、どのようなものであるかについて、法律によって、また教育を通して形成された考えを守護することである。どのような苦痛や、快樂や、欲望のうちにあっても、それを守り抜いて、投げ出したりしないことである。これもまた国民全員にもとめられるものではなく、軍人にもとめられる徳目である。軍人は、恐ろしいものと、そうでないものについて、法にかなった考えを、どんな場合においても保持することがもとめられる。それが勇気であるというのである。

第三の構成要素は「節制」（ソープロシュネー σωφροσύνη）である。節制とは、一種の調和や秩序のことで、さまざまな欲望や快樂を制御することである。すると節制には二つの側面があることになる。一つは、素質の優れたもの、あるいは支配するものと、素質の劣ったもの、あるいは支配されるものとの間に成立する、どちらが支配すべきかについての考えの一致であり協和である。もう一つは、「放埒」（アコラシアー ἀκολασία）の反対概念であって、それは魂の優れた部分が劣った部分を支配し統御している状態であると考えられている。いずれにしても優れたものが劣ったものを統御して、そこに調和が保たれている状態が節制であると考えられている。そして、この点で、先の知恵や勇気のように、国家の特定の構成員や階級にもとめられる徳目ではなくして、すべての人に共通にもとめられる徳目であるところに、「節制」の特徴があり、またその点で、「正義」の徳と共通点を有している。けれども、優れたものや、支配するものにしたがうという点で、それは統治者や軍人以外の階層にとくにもとめられる徳目であるともいえる。

以上のように、「節制」に関するプラトンの説明は二義的であり、一方では、節制は快樂や欲望を制御することであり、したがってまた自己に打ち勝つことであると規定されるとともに、他方では、誰が国家を支配すべきかについて、支配者と被支配者との間に合意が成立しているときに、こうした合意や調和が国家のもつ節制であると考えられている。

最後に、正義（ディカイオシュネー δικαιοσύνη）である。正義とは、以上の三つの徳に活力をあたえ、それらを存続させる働きをするものと考えられる。正義はいわば国家全体にかかわる徳であって、国家を構成する三つの階級がそれぞれに固有の徳を発揮しているとき、すなわち統治者は知恵を、軍人は勇気を、またその他の者は節制につとめているとき、そうした国家は正義の国と呼ばれる。

**4・2** そして国家についていわれたことは個人についてもあてはまる、とプラトンはいう。彼は人間の魂を理知的な部分と気概的な部分と情欲的な部分に分ける。そして国家に知恵があるのと同じ仕方で個人にもまた知恵があり、国家が勇敢であるのと同じ仕方で個人も勇敢であり、国家において優れたものが劣ったものを統治して、秩序と調和が保たれているように、個人において（劣っている）あらゆる欲望が（優れている知恵や勇気によって）よく制御されているのと同じ仕方でよく制御されている。また、このようにして国家を構成する三つの階級がそれぞれの能力や役目を果たすとき、その国家が正義の国と呼ばれたように、魂を構成する三つの部分がそれぞれ固有のはたらきをするとき、その個人は正義の人と呼ばれる。プラトンは魂における正義を身体における健康と比較して論じている。ちょうど身

体が健康であるとは、身体の諸要素がその本来のあり方にしたがって統御されている状態にあるということであるように、魂が正義にかなっているということは、魂の諸要素が本来のあり方にしたがって統御されている状態にあるということだということである。ここに秩序や調和を重んずるギリシア人の価値観がよくあらわれている。プラトンの徳論はこうしたギリシア人の価値観を代弁するものであるといえるだろう。

この知恵（理知的部分）と勇気（気概的部分）と節制（情欲的部分）の関係については、『パイドロス』では、翼をもった二頭の馬車を御する御者の例え話で示されている。一頭は従順な馬（勇気）であって、御者の命令どおり、まっしぐらに天界に飛翔しようとするが、もう一頭は性悪な馬であって、情欲や快楽に執着し、感覚的世界へ舞い戻ろうとする。この相反する二頭の馬を操って、御者（知恵）は天界（イデア界）へと飛翔しようとする。そこに魂の「浄化」（カタルシス *κάθαρσις*）が語られ、またそこから、哲学は「死の訓練」であるという教説が生ずる。

このことについてプラトンは、『パイドン』では、一般に、真に何かを知ろうとするなら、われわれは肉体から離れ去らねばならず、魂それ自身によって、ものごとのそれ自体を観想しなければならないと語り、こうして魂を肉体からできるかぎり分離すること、魂をいわば肉体という束縛から解き放して、それ自体において住まいうるよう慣れさせなければならぬと説き、最後に、もし魂の肉体からの解放と分離を死と呼ぶならば、哲学すなわち知を愛しもとめるとは、死を練習することであり、したがって知を愛するもの（哲学者）にとって、死はいささかも恐怖とはならないということを語っている。（67C-E）

## V 魂の不死説

5・1 『国家』の最終部分では魂の不死についての議論が展開されている。その箇所では、プラトンはまず善と悪の定義をおこなっている。一般に、善とは、事物を保全し利益をあたえるものであり、反対に、悪とは、事物を損なったり滅ぼしたりするものである。また、すべての事物にはそれぞれ固有の悪がある。たとえば身体にとっては病気、食物にとっては<sup>かび</sup>黴、木材にとっては腐朽、金属にとっては<sup>さび</sup>錆がそれである。そしてそうした悪が事物に侵入し事物を犯すと、事物は破壊され滅亡する。だとすれば、反対に、事物がそうした固有の悪に犯されないかぎりは、滅ぶということもまたない。たとえば身体は病気におかされないかぎりは滅びるということもない。食物の腐敗という悪によって滅びるということはない。ただ腐敗した食物が身体のなかに入ってきて、身体に固有の悪すなわち病気をつくり、それが身体を蝕むときに、身体は滅びるというべきである。身体を滅ぼすのは病気であって、食物の腐敗ではない。ただ食物の腐敗は病気を引き起こす一つの要因になっているというにすぎない。

以上のことを魂にあてはめると、魂にはそれを悪化させる何ものかがある。たとえば不正、放縦、<sup>きょうだ</sup>怯懦、無知などである。けれどもこうした悪が魂のなかに入り込むことによって、魂が駄目になり滅びるということはない。事物はそれに固有の悪によってのみ滅ぼされるのであって、それとは別のものに

属するものによって滅ぼされることはないからである。

5・2 では魂はどうして害われるのであろうか。プラトンによれば、それは魂が肉体と結びつくことによって、あるいは肉体との結びつきから生ずるさまざまな災いによって、傷つけられたり、損なわれたりするのである。それだから魂が肉体から離れて浄められ、その本来の姿にもどったとき、それは神的で不死で永遠な存在になる。したがって魂はその本来の姿においては不死であるという。魂はその固有の悪を自分のうちにはもっていない。ただそれが肉体と結びつき、それによってさまざまな災いをうけると、不浄なものとなるのである。これが『国家』における魂の不死説の梗概である。魂の穢れの原因は肉体との結びつきにあるのであって、魂それ自体は神聖であり不滅であるというのが、その根本の趣旨である。

5・3 ところで『国家』の末尾には有名な「エル」の物語が語られている。それは魂の死後ないしは生前の運命を述べたものであって、その「エル」という名前からしても、東方のヘブライ思想に由来するものである。また、そこにはオルペウス教やピュタゴラス学派に共通した思想が盛り込まれている<sup>6)</sup>。

物語の梗概はつぎのとおりである。エルは戦争で最期をとげた後、肉体から切り離され、他の多くの魂とともに、ある不思議な場所につれていかれる。そこには天の穴と地の穴があり、裁判官たちが座っていて、やってきた魂たちを、その生前のおこないに応じて、どちらかの穴に行くように命じる。どちらの穴にも往路と復路があって、先に地の穴に落ちたものは汚れと埃にまみれてその場所に戻って来、天の穴から昇ったものは清らかな姿でその場所に降りてくる。それぞれの滞在期間は千年と定められている。それは魂が生前におこなった行為のちょうど十倍分の償いと褒美を得るためである。そして長い旅路を終えて元の場所にもどってきた魂たちはお互いの経験を語り合う。一方は楽しかった経験を笑いながら楽しそうに話し、他方は恐ろしかった経験を涙ながらに物語る。プラトンはとくに地の穴に落ちたものの味わう恐怖について細々と書き記している。

さて地の穴と天の穴から戻ってきた魂たちは、籤を引いて、その順番にしたがって次の生涯を自分で選ぶ。どんな生涯を選ぶかは本人の自由であり、また籤の順番はその魂の禍福とは必ずしも関係はない。エルの語るところによると、一番籤を引いたものは、躊躇することなく独裁僭主の生涯を選んだ。しかし彼はそうした生涯に、わが子の肉を食らうことや、その他数々の災いが運命として含まれていることに気がつかなかった。そうした運命を後で知って嘆いたがどうにもならなかった。この男は天の穴を降りてきたものであったが、彼は真の知を追及することなく、ただ習慣によって徳を身につけたものであって、苦悩によって学ぶということがなかったからである。これに対して、地の穴から戻って来たものは、自分自身がさんざん苦勞し、また他の人の困苦をも見てきたので、けっして愚かな選択はしなかった。それで、一般論としては、多くの魂にとって良い生涯と悪い生涯が入れ替わることになった。

<sup>6)</sup> 『プラトン全集』11、「訳注」(741頁)参照。

エルはその具体的な例をあげている。かつて（ディオニュソスに仕える狂乱の女たちに殺される）オルペウスであった魂は白鳥の生涯を選び、（ミュージズの女神たちに挑んで敗れた）タミュラスの魂は夜鶯の生涯を選び、（トロイア戦争のギリシア軍の武将で、死んだアキレスの武具甲冑をめぐってオデッセウスと争って敗れた）アイアースは人間に生まれることを嫌い、（妻とその情夫によって殺害された）アガ멤ノーンもまた人間に生まれることを嫌って鶯の生涯を選んだ。そして最後の籤を引いたオデッセウスは前世における数々の苦勞の経験から、名声をもとめる野心を離れて、平穏な一私人としての生涯を選んだ。そして、たとえ自分が一番籤を引いたとしても、同じ生涯を選んだだろうといったという。そこには人生についての深い知恵が織り込まれているといえるだろう。

こうして魂たちがつぎの生涯を選び終わると、彼らは女神アナンケ（必然）の前を通過して、忘却（*Λήθη*）の野へ赴き、放念（*ἀμελής*）の河のほとりで宿営し、そこで定められた分量の水を飲むことに決められていたが、多くの魂は自制することができず、定められた分量よりも多く飲んだので、飲んだ途端にすべてのことを忘れてしまった。そしてすべての魂が寝静まった真夜中に、雷鳴がとどろき、大地が震撼した。すると魂たちは、あたかも流星が飛んでいくように、突如として、方々に、新たな誕生のために空高く運び去られた。

エル自身は河の水を飲むことを禁じられていたが、自分がどこを通過して、どのように肉体にもどってきたかはわからなかった。けれども、不意に、目を開けてみると、明け方に、自分が埋葬のために薪の上に横たわっているのを見出したのだという。

なかなか示唆に富んだ物語であるが、プラトンはソクラテスのつぎの言葉をもって、この物語を、そしてまた『国家』全体を締めくくっている。

もしわれわれがこの物語を信ずるならば、それはまたわれわれを救うことになるだろう。そしてわれわれは、「忘却の河」を無事に渡って、魂を汚さずにすむことだろう。しかし、もしわれわれが、私のいうことにしたがって、魂が不死であり、あらゆる善や悪に耐えうるものであることを信ずるならば、われわれはつねに向上の道はずれることなく、あらゆる努力を尽くして正義と思慮とにいそしむようになるだろう。そうすることによって、この世にある間も……また正義の褒賞を受け取るときが来てからも、われわれは自分自身とも、神々とも、親しい友であることができるだろう。そしてこの世においても、またわれわれが物語った、あの千年の旅路においても、われわれは幸福であることができるだろう。（621C-D）

**5・4** この「エルの物語」で描かれている輪廻説と仏教的輪廻説とは似て非なるところがある。エルの物語では、もともと魂と肉体は別のもと考えられており、肉体の方は滅びるが、魂が永遠に存続し輪廻転生すると考えられている。すなわち「魂の輪廻」（メテンプシュコーシス *μετεμψύχωσις*）である。魂は（自分が宿っている）肉体が滅びると、別の肉体に宿って転生する。また新しい肉体が滅びると、さらに別の肉体に宿って転生を繰り返す。その場合、「エルの物語」にあるように、前世で人間の肉体

に宿った魂は、来世では必ずしも別の人間の肉体に宿るわけではなく、鷲に宿ったり、夜鷲に宿ったりする。いいかえれば人間と畜生との間を往来する。この点は仏教の輪廻説と同様である。けれども仏教的輪廻説では、魂と肉体は分離されておらず、人間がそのまま畜生に、畜生がそのまま人間に生まれかわると説かれる。魂が人間から畜生へとその宿る場所を変えるのではなく、人間自体が畜生に転生し、畜生自体が人間に転生するのである。つまりは身体の輪廻 (メテンソーマトーシス μετενσωμάτωσης) が説かれる。そこには魂と肉体の二元論はない。魂と肉体とを区別するという考え方は希薄である。

また仏教的輪廻説においては、前世における行いの善悪に応じて来世における禍福が決定される。高い身分に生まれるか、それとも低い身分に生まれるか、あるいは人間に生まれるか畜生に生まれるかは偏に前世における行いしだいである。そこには善因善果・悪因悪果の因果応報の観念が健在である。これは、仏教には人格的な神が存在せず、したがって人間を審く審判者としての神が存在しないことと関連があるだろう。行為の善悪に応じて禍福を賦する審判者が存在しないとすれば、正しい行いをしようとする動機づけができない。そのため輪廻が審判者の役割を担っているのである。それだから輪廻は生死輪廻であるとともに業報輪廻でもある。

これに対して「エルの物語」では、魂は来世の存在を籤引きによって選び、自分の意志で何に転生するかを選ぶことができる。したがって現世で正しい行いをしたものが、必ずしも来世で幸福な生涯を送ることができるとはかぎらない。むしろ現世で悪い行いをしたもののほうが、苦勞を多く積み、人生というものを深く反省する機会に恵まれるので、その外面の華やかさにとらわれることなく、真に充実した生を選択することが多いということが暗示されている。ここには人生というものに対する深い洞察と知恵が潜んでいるといえるだろう。けれども、エルの物語においても、現世の行いの善悪に応じて、あの世で地の穴から下りていくものと、天の穴から昇っていくものとに分けられ、それぞれ千年間、業苦と至福の対照的な生活を送った後、一堂に会して来世の自分の生を選択すると考えられているので、仏教の輪廻説とは異なった形ではあるけれども、やはり因果応報の観念は健在であるともいえる。いずれにしても応報主義はわれわれの倫理的生には不可欠の要件である。しかし、それがどういう形で説かれるかというところに東西の思考様式の相違があるといえるだろう。